Osaka University Knowledge Archive

Title	日本中世の禅宗と社会
Author(s)	原田, 正俊
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43044
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【 8 】

氏　　名	原　田　正　俊（はら だ まさ とし）
博士の専攻分野の名称	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	第　14880　号
学位授与年月日	平成11年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	**日本中世の禅宗と社会**
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 平　雅行 (副査) 教 授 村田 修三　教 授 天野 文雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、禅宗の歴史的思想史的展開過程を明らかにすることによって、中世社会における禅宗の役割と機能を解明しようとしたものである。第一部5章、第二部4章と序論・結論とから成り、枚数は890枚(400字詰め換算)である。

第一部1章～4章では、放下僧・暮露といった巷間の宗教者と禅宗との関わりや、東福寺門派が播磨国で悪党や地方武士に受容されていった動向を子細に検討することによって、禅宗受容の民衆的広がりを具体的に明らかにした。そして鎌倉後期の禅宗には2つの潮流があったとする。第1は旧仏教への思想的優越を誇示し、神祇不拝・造悪無碍を主張して修行や戒律を否定し、禅を樵夫・山猟とて得悟が可能な、悟りやすく行じやすい教えと捉えるものであり、もう1つは持戒持律や厳しい修行を強調し諸宗の融合を説いて偏執を戒める立場である。そして鎌倉時代の円爾の東福寺門流には、この両者が混在しており、前者の潮流が自然居士を生んで禅宗受容の民衆的広がりをもたらすと同時に、顕密仏教による禅宗弾圧を不可避とした、と筆者は述べ、やがて五山禅院の権門化のなかで、こうした異端的要素が次第に切り捨てられていった、と展望している。

第5章では鎌倉後期の仏教界を批判的に描いた『天狗草紙』の分析を行った。そして、①『天狗草紙』は顕密諸宗や禅・念仏における驕慢と偏執を批判し諸宗の融合を説いている、②異本の『魔仏一如絵詞』は『天狗草紙』の最終部分を再編して、禅・念仏の徹底的排撃と顕密仏教の優位を説いており、『天狗草紙』とは思想的立場が相違する、③慶政の『比良山古人霊託』との思想的一致や、園城寺を「諸宗法燈・顕密棟梁」としている点から、『天狗草紙』が寺門系の別所たる西山法華山寺を中心とする僧集団によって作られた、と推測している。

第二部1章・2章では、法燈派の無本覚心を中心的素材として、禅宗が念仏や神祇信仰を包摂していった様相を明らかにした。なかでも一遍参禅説話の分析は重要である。これは一遍が無本覚心に参禅して、その境地を認められて印可を受けたという説話であるが、筆者はまず詳細な文献批判を行って、この説話が高野山の萱堂聖によって創作されたとする五来重説を批判し、15世紀半ば五山禅僧の手になるものとする。ついで、この説話が成立した背景には、鎌倉時代の禅僧と遁世僧との活発な交流や、禅僧による勧進聖の編成があったことを明らかにした。そして禅僧と遁世僧・勧進聖を結びつけた思想的紐帯が念仏禅の鼓吹にあり、禅僧が禅と念仏三昧の一致を説くことによって、遁世僧

や勧進聖さらには民衆的世界への影響力を強めた、と指摘している。また3章では、天神（菅原道真）が中国の無準師範に参禅したという説話を元にして描かれた渡唐天神画像の分析を行い、それが神祇や儒者の禅宗帰依の説話として利用され、やがて詩文の流行や和漢連句の盛行のなかで渡唐天神画像が広く流布していったと述べている。

第4章では中世禅宗寺院の寺院法184点を蒐集して、顕密寺院と対比する中でその組織構造の特質を検討した。そして、①顕密寺院では様々な諸職が師資相承され私物化される傾向が強かったのに対し、禅宗寺院では十方刹であれ、徒弟院であれ、遷替の職化（私物化の排除）が一貫して指向されていた、②禅宗寺院の公界は世俗権力によって保証されており、これが世俗権力による公の収斂の一要因となった、と述べている。また「結論」では、鎌倉後期から室町時代における禅宗の展開を概括するとともに、特に鎌倉後期から南北朝時代に激しく対立した顕密仏教と禅宗が、室町殿の下で共存・併置されるに至った歴史過程を明らかにした。五山長老は門跡・准后と同格として社会的に処遇されたが、顕密寺院の門跡が摂関家など上流貴族に独占されていたのに対して、五山長老は武家被官クラスの出自の者も多く、こうした身分的開放性が武家子弟の五山進出をもたらした、と指摘している。

論文審査の結果の要旨

本論文の成果としてまず挙げるべきは、禅宗受容の社会的広がりを明らかにしたことである。従来の研究にあっては、禅思想の高踏的性格や権力による庇護が強調されて、その民衆的受容については否定的であった。それに対して筆者は、禅宗が放下僧・暮露などの民間宗教者や悪党らに影響を与えていた実態を具体的に明らかにするとともに、禅僧による勧進聖や民衆の編成を容易にした装置として念仏禅の鼓吹があったことを解明してみせた。つまり禅宗の社会的浸透は禅だけでなく、念仏や神祇信仰を媒介として達成されている。こうして筆者は、鎌倉時代における禅宗が、宗教運動とも言いうる程の社会的広がりの中で受容されていたことを明示してみせた。これは高僧伝の羅列に終始しがちな禅宗史像を大きく塗り替える重要な達成である。

第二に指摘すべきは、本論文が禅宗史の展開を動態的に捉えていることである。近年、律僧を中心に禅律僧研究が急速に進展し、厳しく戒律を守った清廉無私な僧とのイメージのもと、彼らが寺院修造・交通路整備・葬祭など多様な活動を展開していた実態が明らかにされて、鎌倉後期から南北朝時代は「禅律僧の時代」とまで呼ばれるに至っている。本論文は、禅律僧論の観点から禅僧研究に本格的に取り組んだ初めての業績であるが、しかしこれは、禅律僧論を単に禅宗で再確認したというものではない。即ち筆者は、鎌倉後期の禅僧が禅律僧的性格だけではなく、異端的相貌をも有した混沌の中にあったことを明らかにするとともに、やがて禅宗が権門化してゆく中で、異端的側面を切り捨てて禅律僧そのものへと収斂していったことを明らかにした。こうした歴史のダイナミズムの中での禅宗把握は、方法的にも実証的にも、禅宗史や禅律僧研究に重大な論点を提起するものである。

第三に指摘すべきは、本論文が禅宗から見た禅宗史ではなく、禅宗の全体史的把握を意識的に追求していることである。宗派史的方法の欠陥については、黒田俊雄らによって厳しく批判されてきたが、史料の特殊性もあり、その克服が最も立ち遅れていた研究領域の1つが禅宗史であった。それに対して本論文は、寺社勢力論の達成を踏まえて顕密寺社と禅林との寺院組織としての質的違いを明らかにしたり、室町殿が顕密仏教と禅宗を併置する形で寺社編成を行った具体的様相を解明した。また五山と林下の差異を叙任権者の相違（武家か朝廷か）に求めて、戦国期における天皇権威の上昇の中で林下の発展を捉え直そうとするなど、禅宗の多角的全体的な把握に努めていることは大いに評価されてよいだろう。

勿論、残された課題もある。武家の密教受法をめぐる議論には、武家出身僧と在俗武家（出家入道を含む）の受法の区別に混乱があるし、禅僧の葬祭（触穢）と国家祈禱との関係の説明もなお検討を要しよう。また本論文が提起した論点や展望のなかには、今後の検討を要するものも少なくない。しかし、緻密な実証と大きな構想の中で、中世禅宗に迫った本論文は、禅宗史はもとより中世仏教史や中世社会論・文化論への重要な貢献として、長く研究史に残るであろう。

本研究科委員会は、本論文が博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。